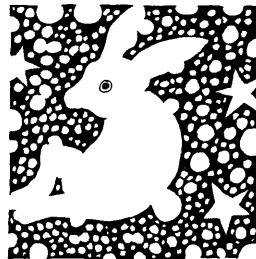


私が幼児教育を志した頃(3)



津守 真

岡部弥太郎先生と幼児教育とコメニウス

敗戦の日から八カ月を経て、昭和二十一年四月には、大学の年度も新しくなり、学生は通常の生活に戻った。世の中全体が茫然自失混乱の状態からよう

やく前に向かって進みはじめた。

文学部アーケードには、新しい講義題目が貼り出された。実験心理学、ゲシュタルト心理学など専門の講義にまじって、岡部弥太郎先生の「幼児教育」があった。私の大学の日課は実験心理学の専門科目

に追われていたが、「幼児教育」には欠かさずに出席した。岡部先生の第一のトピックは、幼児教育の明けの明星と言われるコメニウスだった。先生は立派な口髭を生やしておられたが、途中で学生の感想を聞きながら訥々と語られ、派手な講義ではなかった。テーブルを囲んで数人の学生が集まっただけで、ときには私一人のこともあった。いま思うと、このことを抜きにしてこの後の私の歩みは考えられないので、これについて少しく記したい。

コメニウスについては、当時は佐々木秀一著『コメニウス』という岩波大教育家文庫（昭和十四年）があるだけだった。コメニウスの祖国、モラヴィア同胞教団は三十年戦争に敗れ、コメニウスは教団の人々を率いて各地を転々と逃れ、遂に国外のポーランドのリッサに行った。一六二五年である。彼は祖国の復興は教育にあると考え、学校を興し、その間に「大教授学（ディダクティカ・マグナ）」など、

現代にまで重要な教育学の大著を残した。幼児期の教育は彼の教育学の中で重要な位置を占めている。彼の祖国復興の夢は叶えられず、彼の考えは次第に民族を超えて世界の平和に広げられ、パンソフィア（汎智学）の構想に至る。

その後、コメニウスは、英国、オランダ、などの平和主義者と交わりヨーロッパ各地を遍歴し、一六七〇年にオランダで死んだ。

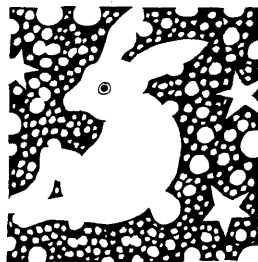
岡部先生は、なぜコメニウスを第一のトピックに選ばれたのか。すべてが焼け野原になった戦後日本の状況がコメニウスが遭遇したモラヴィアの敗戦時とよく似ており、祖国復興がこの最初の教育学者のモチベーションであることに岡部先生は着眼しておられたからだったのではないか。コメニウスは戦争によって二度までも家財、原稿一切のものを失ったと言われる。第一回は一六二二年で、彼の住んでいたフルネックの市街は焼き払われ、「神より与え

られし職業を奪われ、その未来を奪われしのみならず、また多くの貴重な過去（文庫、手稿）をも奪われ、愛妻をも失った（佐々木前掲書P・14）という。コメニウスが祖国を追われてモラヴィア同胞教団の人々を率いて各地を転々と逃れた話を聞いたとき、私はその逃避行の有様を想像した。その中には婦女子や乳飲み子、幼児、老人、病人、障害をもつ人達も含まれていたろう。どんなにか苦勞があつたに違いない。教育学はそういう中から生まれ、祖国復興の希望を与えた。いささか想像が過ぎたかもしれないが、当時の限られた知識の中でコメニウスの全体像を考えると、決して間違つた理解ではなかつたと思う。

岡部先生は、この講義の中で、稲富栄次郎のことに、とくに言語学と関連して何度もふれられた。そのときには私は岡部先生が何故そんなにこの人にこだわっておられるのか、幼児教育とどう関係するの

か、理解できず、長い間私の疑問であつた。稲富栄次郎は広島出身で教育学者である。私はごく最近になって知つたのだが、稲富栄次郎に

は『広島原爆記―未来への遺言』という著述がある。それは昭和二十四年に公刊されたが、岡部先生は稲富が原爆で被災されたことを当然知っておられただろう。昭和二十年八月六日の日記から始まり、学者の手になる日を追つての詳細な記録である。稲富の家は奇跡的に無傷で残り、原爆直後、何人も被災者を泊めることになる。その記述は熱い思いなしには読めない。稲富栄次郎は後にコメニウスの『大教授学』を翻訳し出版しておられるが（昭和三十一年）、私がこのことを知つたのも最近である。



岡部先生はこのことも当時から知っておられたのではなかったか。敗戦を肌で体験した日本人には、深いところでコメニウスへの共感がある。

コメニウスと私―その後

コメニウスについては、私はその後何度も考える機会があったので、時代がジャンプするが、このついでに述べたい。

一九七九年、六月、私はオランダの現象学者エディト・フェルメール先生をユトレヒトに訪ねた。

そのときに現象学的教育学の長老であるM・J・ランゲフェルト先生のお宅にも招かれた。私がコメニウスに関心をもって、いることを知っておられたフェルメール先生は、コメニウス終焉の地、ナアルデンに案内してくださいました。ナアルデンはユトレヒトの北東二〇kmほどのところにある。コメニウスが最晩年を過ごした小さな家がコメニウス博物館として残

されている。すでに夕暮れに近く、博物館は閉館されて入ることはできなかったが、コメニウスが使っていたテーブルや椅子がいまも置いてあるとのことだった。周囲には店も家もなく、四角い小さなコメニウスの家は薄暮のなかにひとり立っていた。近くには五稜郭と同じ形の中世の城砦があつて、コメニウスは戦乱の世に生きていたことを思い出させた。

このナアルデンの町で、ランゲフェルト先生は奥様を亡くされて後、最後の数年を過ごされた。一九七九年十一月に来日され、お茶の水女子大学でも講義をされて間もなくのことである。

その後私は、『コメニウス教授学著作全集』出版三〇〇年記念にユネスコから出版された『現代におけるコメニウスの意義―ヨハン・エイモス・コメニウス』を読んだ。それにピアジェが序文を書いている。ランゲフェルトは、ピアジェとは年来の論争相手である。私の研究室を訪ねられたとき、私の本棚

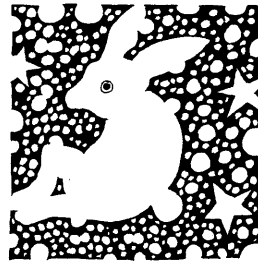
にピアジェの英訳本が十数冊並んでいたのをいち早く見て、これはロンゲ・コレクシオン（誤った蔵書）だと鋭く指摘されたことがある。私はいまもピアジェとコメニウスの結び付きについては疑問のままである。

一九八八年にOMEP四〇周年世界理事会がチェコのプラハで開催され、私も出席した。コメンスキー（コメニウスの別名）の名は多くの人の演説や講演でしばしば言及され、チェコの国民的英雄として現代に生きていることを私は知った。

プラハ市庁舎の前に宗教改革者フスの大きな銅像がある。フスは宗教改革の初期、十三世紀に、当時のカトリック教会に反逆し、聖書をチェコ語に翻訳して庶民のものとした。そのためにローマカトリック教会によって、火刑に処せられた。フスの銅像の下部には、赤ん坊を抱いた女、慟哭する老人など、何人もの庶民の像が一緒にいる。一人の処刑された

指導者の下にこういう人達の生活があったことを、チェコの人達はいまも忘れていない。フスは宗教改革者であったと共にチェコ独立の愛国

者であった。フスが火刑になった教会の尖塔がそこから見える。ボヘミア同胞教団はフスの教団と関係が深い。コメンスキーも母国語に情熱をもっていたことは、フスとの関係を考えると納得がゆく。ただ、フスの教団が戦闘的だったのに対してボヘミア同胞教団は終始平和主義を貫いた。晩年コメンスキーにとって、祖国復興の望みが絶えととき、彼は民族の枠を越えて世界の平和へと視野がひろがった。私には英雄コメンスキーよりも教育学者コメニウスの方が親しみ深い。



ブラハにはコメンスキ博物館がある。かつてお

茶大の児童学科で助手をしていたOさんがチェコの方と結婚しておられ、Oさんの通訳で興味深いひとときを過ごした。説明係の老齢の婦人は、コメンスキの日常生活までこまかく研究していて、娘にダイヤモンドの指輪を買ったり、彼が人間としていかに矛盾にみちていたかを、家計簿まで示して話してくれた。こういう話はコメニウスの価値をいささかも損ないはしない。むしろ、ただ直線的に進むだけではなかった人間コメニウスに親しみを感じさせ

る。

昨年一九九八年に、OME P第二十二回世界大会がデンマークで開催されたとき、出席できなかった私に、チェコOME Pのミスルコワ女史が『コメニウスの遺産と幼児教育』という書物を届けてくださった。コメニウス生誕四〇〇年記念大会（一九九二）の論文集である。OME P世界総裁エバ・バル

ケが結びの章を記している。

コメニウスについては、堀内 守の『コメニウスとその時代』（玉川大学出版部）が一九八四年に出版されている。現場の実践に毎日を過ごしていた私はその頃本を読む余裕がなかった。今回この原稿を書くにあたって、はじめてこの書物に目を通し、新たに学ぶことが多くあった。そして半世紀前に岡部先生から私が学び考えていたことと食い違うことはないことを知った。それ以上に、コメニウスの思考そのものが現象学的であり、現代に新しいことを知った。この書物の最終章は、「両義性の哲学」である。

私はどのようにして

子どもの学問を専攻するようになったか

岡部弥太郎先生によって、私は幼児教育の手ほど

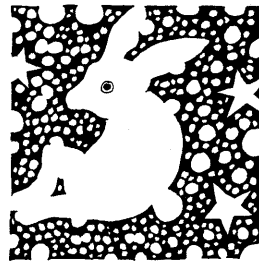
きを受けたが、先生との出会いには更に前史がある。それは私の専門の選択と関係があるので、旧制高等学校の時代に溯つて述べたい。

旧制高等学校の私の学年は、戦時特別措置により、本来は三年の在学年数を二年に短縮され、昭和二十年三月卒業となった。戦局は緊迫し、私より一年以上上級学年の多くの人達は学徒出陣で前年の秋に出征した。私共は勤労働員で埼玉県の農家に泊まり込み、何カ月も農作業に従事した。農家では、男たちは出征して男手がなかったから、私共は親切にもてなされた。麦刈り、蚕の世話、繭を大八車で一里もある道を駅まで運ぶ等。夜には床の間付きの座敷に寝かしてもらい、農家のお嫁さんが焚いてくれた土間の五右衛門風呂には一番に入れてもらった。いまになると民族的な体験だが、労働はつらかった。私のクラスの担任は、ドイツ文学の手塚富雄先生で、久しぶりに授業に戻ったとき、「麦刈りも辛い

けど、ドイツ語を読むのはもつと辛いですよね」と私共に話された。学校の授業は勤労働員の合間に朝から夕方まで集中して行われた。全寮

制の旧制高校は、自治寮で朝から夜まで忙しかった。その間に徴兵検査があり、また、大学の進路も定めなければならなかった。将来の進路の選択は慎重でなければならぬが、人生の重要な選択は多忙な日常生活の中でなされるのは、どの時代にも共通であろう。忙中に閑を見いだし、日常の人や物との出会いのチャンス逃がさずに新たな発想と思索の時とするのも、いつの時代、どの境遇のもとにも共通であろう。

勤労働員は川口の鉄板圧延工場に変わった。昭和



二十年は一月六日から庄延工場の仕事が始まった。厚い手袋を重ねてはめて、赤く焼けた鉄板が灰色になるのを見定めて、圧延ローラーのあいだに鉄板を誘導する作業で、一瞬も気をゆるめることができない。「今日もまた機械の前で一日は過ぎんとす。無為にして機械の前に立つことが国への奉公か。一冊の本でも身にこなして自己を作り、米英に劣らぬ社会―その頃は米国も英国も日本の敵国だった―を作ることが日本への一番の奉公ではないか。―昭和二十年一月六日」と日記に記しながら、「工場の生活は一つの人格修養とはなり得よう。工場の現実が我々の前にあるからには、その中で最善を尽くすよりはかあるまい。」と矛盾したことを考える。私が岡部弥太郎先生を愛育研究所に訪ねたのは、そんな生活の最中、昭和二十年一月十六日だった。岡部先生は私の母の幼な馴染みで、その当時、母子愛育会愛育研究所の初代の教養部長だった。晴天でも蝙蝠

傘をもって歩くという逸話を母から聞かされていた。先生は教育学科の講師だったが、心理学の出身で、職業適性検査を淡路円次郎等と共に作られていたから、新式なもの好きな母としては、私の職業適性を診断してもらいたいという気もあつたのかもしれない。私は私なりに、「哲学も歴史も、文学も心理学も勉強したいが、同時にすべてを為すことはできないから、心理学はどうか」などと勝手なことを話した。心理学の書物など一冊も読んだことはなかった。それだけに、その後、先入観なしにこの分野を専攻し、納得するところに行き当たるまで遍歴することができたのかもしれない。岡部先生は、「これからはあらゆる分野が、倫理学までも、心理学なしには考えられない時代になるから」と言っていて、心理学を専攻することをすすめられた。この日、私は家に帰ったときには、心理学専攻をきめていた。迷っているときに会おう偶然のチャンス

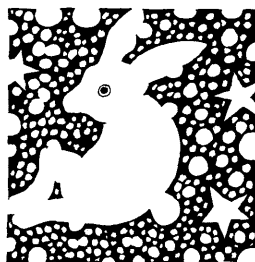


は、生涯にわたって力をもつ。この後、進路に迷っている若い人から私自身が相談に乗る機会が何度かあったが、いつもこの時のことを考え、身の引き締まる思いがする。「うす暗き机の前に筆をもち、わが行く末をふるえつつ見る」と、岡部先生を訪ねた日、私はノートに記した。決めるということは、他の可能性を放棄することである。しかも未だ前に向かって進んでいるという実感はなく、黄色く暮れてゆく窓を眺めて、心もとなく将来を見ていたのを思い起こす。それから五十五年間の自分の歩みを俯瞰して、曲がりなりにも同じ分野にとどまり、子どもの仕事へと向かうようになったことを不思議に思い、また感謝している。高等学校の生活は相変わらずで、川口の庄延工場と相半ばして続いていた。「工場で一日働くと、眠くなつて致し方ない。頭が細かく働かなくなる」「疲れ果ててくたくたの身を床に横たえる」という記述が毎日つづく。そ

の工場の生活も二月十三日に終わるのを待ち兼ねて、昭和二十年二月十八日に私は再び岡部先生を愛育研究所に訪問した。

アーノルド・ゲゼル乳児研究との出会い

この日、岡部先生を愛育研究所に訪ねたのは、心理学科入学決定の通知を受けたことの報告が主目的だったが、前回訪問の折りに、先生の背後の本箱に、赤ちゃんの写真が表紙にのっている大型の写真集が目にとまり、それを見たかったという理由があった。この日、岡部先生は気楽に私を迎えてくださり、「この研究所には赤ちゃんがいるからこんなものがあるんだよ、君」と言つて穀乳を御馳走して





くださった。穀物からとった牛乳の代用食である。

当時はこんなものが御馳走だった。その日、私はその数冊の乳児研究書を手に取った。アーノルド・ゲゼルの『Atlas of Infants』という大型の書物だった。ゲゼルは生後四週からはじめ、四週おきに乳児の発達の詳細を極めた研究があることはいまではよく知られているが、私には大きな驚きだった。愛育研究所には一九三〇年代の児童心理学の洋書が沢山あった。一九四四年当時には、一九三八年出版の洋書と言えば最新の書物だった。一九四一年に太平洋戦争が始まってからは洋書の輸入は皆無だった。この日、ゲゼルの乳児研究にふれたことが、後になって私が「乳幼児精神発達診断法」を作ることになった最初の契機である。ゲゼルについては、後に米國に留学したときすでに、いろいろと批判を聞いたが、理論よりもまず乳幼児を丁寧に見た点で、彼の業績は現代に生きていると思う。

人はどこかの時点で自分の未来について、ある願いを抱くようになる。その願いを抱きつづけていると、いつかはそれは形を成す。私自身の専門分野の半世紀の歩みを顧みて、私はこう思う。願いを抱かなかつたら何も起こらない。私が子どものことに興味を抱くようになったのは、さらに前史があるが、それを述べるには幼少年期にさかのぼるので、ここでは省略して先に進めることにしたい。